



自閉症スペクトラムの特性理解と支援 門 眞一郎 先生 (京都市児童福祉センター)

はじめに、DSM-5の「対人的やりとり・コミュニケーションの問題」「行動興味活動のパターンが限局的反復的」という診断基準を踏まえたうえで、自閉症スペクトラムの特性の「減り張り」についてお話いただきました。中でも最も重要な「減り張り」は、「音声言語だけでは正確なコミュニケーションは難しい」「相対的視覚優位(Visual learner)」「不適切な視覚刺激にも惑わされる」という点でした。このような特性をもっているからこそ、自閉症スペクトラムの人への支援の根幹は、コミュニケーションの支援であり、自閉症の人に「どう伝えてもらうか(表出のコミュニケーション)」と、自閉症の人に「どう伝えるか(理解にコミュニケーション)」というコミュニケーションの両面を、「張り」を活かして、視覚的に支援していくということが軸になっているというお話でした。

自閉症の人に「構造」を明確に理解してもらうことが「構造化」の目的であると、門先生はおっしゃっていました。「構造」とは、「いつ」「どこで」「何を」「どのように」「いつまで」という場面の意味と見通しであり、それらを明確にすることが「構造化」であるとのことでした。その手段として、聴覚的、視覚的、触覚的、嗅覚的、味覚的な手段や、ルーチン、パターン等、自閉症の特性の「張り」を生かした、様々な工夫があるのだそうです。空間の構造化では、目的別に場所(コーナー)を設定したり、動線をシンプルにしたり等、教室内の整理や家具の配置を工夫することが挙げられました。そうすることによって、自閉症の人は、見たらすることが分かって見通しが立ち、自発的に行動することができるということでした。また、「これからすることは何か」「どんな順番ですのか」という予定を視覚化して明示する時間の視覚的構造化(スケジュール)は、特に重要であるとのことでした。見通しをもって行動できることで、自閉症の人は、不安やイライラが軽減したり、変更や待つことができたり、自発的に行動が選択できたりするようになっていくので、スケジュールは、無くしていくのではなく、自己管理していくことが目標であるとのことでした。

コミュニケーション支援の手段としては、補助・代替コミュニケーション(AAC)についてお話いただきました。自閉症スペクトラムの人にとって、補助(augmentative)とは、音声言語によるコミュニケーションの効果を補強するために、音声言語以外のコミュニケーション手段も使うことであり、代替(alternative)とは、一時的あるいは永続的に、音声言語に代えて別のコミュニケーション手段も使うことを意味しているとのことでした。他者に対して効果的にコミュニケーションを自発するスキルと、他者からのコミュニケーションに回答するスキルの両方を、ご本人が落ち着いて効果的に使うことで、例えば自傷や他害のような問題行動と言われる表現手段を使う必要がなくなるとのことでした。

そのようなAACの一つとして、PECS(The Picture Exchange Communication System 絵カード交換式コミュニケーション・システム)を、ご紹介いただきました。自発的な表出のコミュニケーションを重要視しており、般化が難しいという自閉症スペクトラムの特性を踏まえて最初段階から般化に取り組むのだそうです。具体的には、いろいろな好子(本人にとって好きなもの、好ましいもの)を使って、いろいろな人を相手にし、いろいろな場面でPECSが実行できるように般化を促していくとのことでした。

また、理解スキルの習得には、視覚的構造化をしっかりと行うことが有効であるということで、「まって」に応じてもらうことや、「ない(No)」の伝え方についても、視覚的の手がかり(カードやチップ、サイン等)を使って伝えるアイデアをご紹介いただきました。さらに、自閉症の人が、うまく社会生活を送るためには、ソーシャルスキルを理解することが必要であり、ソーシャルストーリーズやコミック会、パワーカード等々、様々な技法が実践されていますが、いずれも視覚的構造化によって、具体的・肯定的・視覚的に教えているとのことでした。

門先生は、最後に、「自閉症スペクトラムの人に、視覚的なコミュニケーション手段を保障しないことは、差別的行為であり、権利の侵害であり、心理的虐待であり、ネグレクト(怠慢)である。」という「警告!」を発せられて講演を閉じられました。

(文責:岡村)

平成26年度 教師と施設職員のための

自閉症療育実践セミナー

7月20日～21日

in 蘇我勤労市民プラザ

当研究会のスーパーアドバイザーである安倍陽子先生（横浜市東部地域療育センター）、中村公昭先生（横浜やまびこの里）、高橋亜紀子先生（株式会社エンカレッジ）をトレーナーに迎え、受講生24名が参加して行われました。Aさん（中学2年）、Bさん（生活介護事業所）、Cさん（就労継続B施設）の3名が2日間協力して下さいました。

Aグループ

<場所の工夫>

刺激の調整を行った方が、より落ち着いて過ごすことができるので、目の高さ程度の低めのパーテーションを使用し、「自立課題をする場所」「先生と勉強する場所」「プレイエリア」を設置し、活動と場所を一致させた。自立課題を行う机は壁向きに設置し、一人で行う活動に対しては、さらに刺激の少ない環境を設定した。

<スケジュール>

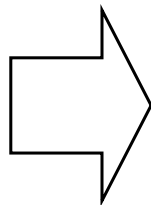
予定されている活動を1枚ずつ「イラスト」または「写真」をカードにしてボードに提示した。提示する量は2枚とし、上から順にカードを取り、示された場所に移動して同じカードが貼られたポケット（封筒）にマッチングして入れるようにした。スケジュールボードは、プラスチックケースを裏返した立体的なものにし、マジックテープでカードを留めて提示した。カードは取りやすいように設置し、スケジュールボードの縁から飛び出すように、少し右にずらして提示した。トランジションカードは「Aさんの顔写真」とし、活動が終わるとそのカードを持ってスケジュールに移動して、ボードの上に貼られたAさんの顔写真の上にマッチングするようにした。



<ワークシステム>

1日目の評価で、色のマッチングが強みあることが分かったことから、「色カードのマッチング」「めくり式で1枚提示」によるワークシステムを作成した。棚には色カードを付けたバスケットを数個用意し、色のマッチングで選んで自立課題を行った。色カードをマッチングしてバスケットを選ぶことは確実にできたが、めくり式のワークシステムではエラーがあったため、再構造化を図った。差し込み型で手前から順に色カードを取るシステムに変更した。すると、どの色カードを取るのかが明確になり、手前のカードから確実に取り、色マッチングでバスケットを選ぶことができるようになった。

このシステムは、家事スキルでも応用することができた。



<自立課題>

「はさみの使用」「事務作業（はんこ押し）」「懐中電灯の組立」「パッケージング」「靴下たたみ」他、各領域で自立課題を作成した。初めに作成した自立課題では、視覚的指示（見て分かる）や視覚的組織化（材料を重ねる、立てる、仕切る）などの観点で、Aさんには分かりにくい部分があった。Aさんにとって分かりやすい視覚的指示、材料や出来上がりの場所などバスケット内の組織化を再構造化して、自立的に取り組むことができる課題に修正した。



（文責）Aグループ・トレーナー

【安倍先生から】



今回のトレセミは、新たな場所での開催でしたので、私たちスタッフも全く見通しがつかず、心配されました。が、無事に2日間を終えることができました。東京・群馬・山形県など県外からの参加者も多く、成人2グループ、学齢1グループの計24名で行われました。今回もより評価と実践をとり入れたプログラムでした。セミナー初日には、自閉症スペクトラムの学習スタイルを学び、一人ひとりの協力児者の評価から、部屋内の構造、スケジュールとワークシステムを作りました。いかに個々に合わせて設定し構造化するのかを体験していただきました。2日目は、自立課題の意味を知り、評価後、何課題かを作成、実施して、協力児者が自立して行えるように考えました。また、システムを家事活動にも応用し自立的に取り組めるようにしました。評価→構造化→再構造化の流れで、一人ひとりに合うように繰り返し行うことがいかに大切かを学ぶことができたと思います。受講者がお互いにチームで学び合えることも有意義でした。協力児・者や受講者の皆さま、裏方で力となってくれたスタッフに心から感謝申し上げます。この実践セミナーが、読んで下さる多くの方々にもお役に立てば幸いに思います。

Bグループ

<場所の工夫>

作業エリア、休憩エリア、1対1エリアを設置し、活動と場所を一致させた。また、移動中、スタッフへの確認行為や多くの人が動いていると確認する傾向が見られた為、活動に集中できるよう高さのあるパーテーションを導入し刺激を整理した。

<スケジュール>

固定式で絵と文字を組み合わせたものを半日程度提示し、活動場所へカードマッチングで移動するようにした。トランジションカードは名前で提示することで、自らスケジュールを確認できるようにした。

<ワークシステム>

3枚の色カードを上から順番に示し、左の棚から色マッチングをして作業を行うようにした。課題が終わったら、フィニッシュボックスに入れ、全ての課題を終えた後はトランジションカードを使用してスケジュールに戻る形で行った。マッチングが得意な為、1~2回の教授手続きで行うことが出来た。

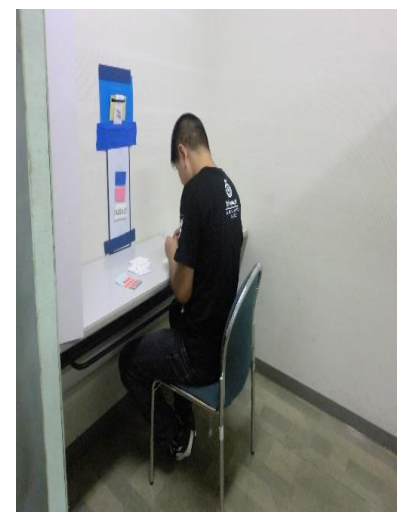


<自立課題>

「ハンコを押す課題」「シャンプーボトルのパッキング」など、本人のできる活動を活かし、10種類程度の課題を用意した。特に本人の好きな電車の駅名を、順に並べていく課題は、関心が強く意欲的に取り掛かろうとする姿勢が見られていた。一方、複雑で工程が多い課題や、道具（ホッチキス）を使用した課題は扱いにくく集中出来なかった。そのような課題に対しては、課題分析を行うことで作業工程を整理し、新たにジグを作成するなどした。

<余暇スキル>

自らテーブルを拭き、飲み物とお菓子を用意し、飲食した後、自分で片付けるといったセッティングを行った。ワークシステムを有効活用することで、ほぼ自立して取り掛かることが出来た。



(文責) Bグループ・アシスタント

Cグループ

<場所の工夫>

Cさんは、刺激を排除し区切られた場所で集中できることからパーテーションでエリアを分けた。「1対1の個別の場所」「作業場」「休憩所」「余暇の場所（ゲーム・お茶）」を設置した。成人期グループということで、全体の場所が見渡せるよう活動場所の様子がわかるよう工夫した。自立課題を行う「作業場」では、Cさんの特性と合わせて、将来、職場で生かせるための視点を大切に場所の設置を考えた。

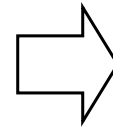
<スケジュール>

文字の読み取りは得意だが、イメージを持ちにくいことから内容を正確に伝えるために「イラスト」と「文字」をカードにしてボードに提示した。一日の流れを提示し、上から順にカードを取るようにした。トランジションカードは「スケジュール」と文字で示し、スケジュールの上に提示したポケットに入れるという手続きにした。



<ワークシステム>

1日目の評価で、視覚的な情報を処理することが得意で、複雑な記号を弁別することが可能だったことからワークシステムを記号等のマークで作成した。棚を少し離れた後ろ側に設置し、一人で課題を取りに行けるよう再構造化した。しかし、自立課題が終わった後にスケジュールに戻ることに難しかったため、ワークシステムの終わりに「スケジュール」カードを準備し、カードを持ってスケジュールに戻れるよう再構造化した。



<自立課題>

「CDケースの組立」「家事スキル（お茶の用意）」「衣類たたみ」「はかりを使用した計量」「お金の支払い」他、各領域で自立課題を作成した。



成人期に重要な余暇や家事スキルの課題も取り入れ、Cさんの好きなコーヒーを休憩時間に準備する課題を取り入れ「余暇の場所」で実施した。最初は、コーヒーカップとお皿の置き場所が曖昧でテーブルにこぼしてしまったことから写真による手順書とお盆にお皿とカップの置き場所がわかるようにジグマットを設置するなどの修正をした。

(文責) Cグループ・アシスタント

「PEP-Ⅲ」（自閉症のある子どもの評価）実践セミナーのお知らせ

期日：平成26年10月25日（土）10：00～17：00（受付9：30）

場所：きぼーる13階 会議室1・2・3（千葉市中央区中央4-5-1）

内容：PEP-Ⅲ検査及び評価の実習 ※映像を使用します

講師：三宅 篤子 氏（国立精神・神経医療研究センター）

参加費：会員5,000円 非会員9,000円

申込締切：10月4日（土） ※申し込み受理後、受講内定通知をお送りします。

平成26年度 TEACCHプログラム研究会 第4回連続セミナーのお知らせ

期日：平成26年11月22日（土）13：30～16：30（受付13：00）

場所：きぼーる13階 会議室1・2・3

演題：「保護者として」（仮題）

講師：佐藤 彰一 氏（保護者、弁護士、國學院大學法科大学院教授）